
輪廻転生

よこたて十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻転生

【Nコード】

N52890

【作者名】

よこたて十

【あらすじ】

人間は生まれながらにして迷いを抱えて生まれてくる。その迷いとはなんなのかすらわからず迷い、迷いを断ち切るために何をすればよいのかと迷う。そして、永遠に輪廻の輪から抜けることができない。瞳に六と刻んだ少年は嫣然と嗤った。本作は家庭教師ヒットマンREBORN！の二次創作となっております。なお、捏造等が嫌いな方にはむいておりません

(前書き)

夢いっぱい捏造いっぱい

苦手な方は早めに逃げてください

神は死んだ。

この世に神などいない。

慈悲深き神など疾の昔に死に朽ち果てたのだ。

まだ神などが存在するのならば、今の僕はここにはいないであろう。しかし、まだあなた方の信じる『神』というものがいるのなら、僕が殺してさしあげませう。

僕が信じるのは、仏だけだ。

輪廻を司りし、観音様だけが僕の信じるべき大いなる存在である。

堕ちろ、

そして巡れ。

血塗れの部屋の中に少年がいた。

両手を暗い天井に差し上げて、狂ったように笑っていた。

「 om amogha vairocana
maha-mudra mani padme
jvala pravartaya hum
」

少年は青と赤のオッドアイであった。

青い瞳を細くしかめるように、赤い瞳を大きく見開いて笑っている。他人を蔑むような、見下すような、嘲るような微笑であった。

「不空なる御方よ、毘盧遮那仏（ヴィローシャナ）よ

偉大なる印を有する御方よ、宝珠よ、蓮華よ

光明を放ち給へ」

足元に倒れた血塗れの男の頭を踏みつけながら、歌うように高らかに仄暗い部屋に響き渡る声で叫んだ。

「人間は迷いを抱えて生まれてくる」

「観音様は偉大な御方おんかたでございますので、愚かな人間を救うために、試練をお与えになられた。それが、六道輪廻」

「永久に死に、生まれてくることを繰り返す。けれども、人間にはそれがわからない。疑問だけを抱き、清らかな心を持って悟りをひらくことをしない」

「だからこそ、何度でも死に、巡り、生まれ、死ぬことを繰り返させたい」

「愚かな人間の血の色はどんな色でございますか？ 過ちしか持たない人間であっても、血の色だけは美しいのではないのでしょうか」

「この世界を愚かで清らかな血で染めてみせましょう。そうすれば、人間にも輪廻転生こんわうてんじやうの理を知る。そして、観音様の偉大さを思い知ることができる」

* * *

「あなたは、輪廻転生を信じますか？」

突然何を言い出すのかと思った。

その表情は慈愛をたたえながら禍々しさをありありと張り付かせた、ぞっとするほどに甘い微笑。

身震いしたくなるほどに恐ろしいと思った。けれども、同時に美しいとさえ思った。

そう思わせるだけの魅力が、彼にはあった。

その微笑は人間的でありながら、神秘性も持ち合わせた、人間にな

れない者。

「僕は、輪廻転生を信じております。狂信的ともいわれます」

そのとき、ガチン、とトンファーが止められた。見れば、三叉の穂の間に器用にひっかけられていた。絶妙な角度で噛み合ったふたつは、どう動かしても、ぴくりとも動かなかった。

その生白い貌をじつと睨みつけても、甘い微笑は変わらない。

むしろ、微笑が深くなったようさえに思えた。

「僕は、神が嫌いです」

空いた方の手でその貌を打とうと大きくふりかざしたが、その動きよりも先に、彼は引つ掛けたトンファーを持ち上げて投げ飛ばした。「聞く耳を持たず必死の懇願すら簡単に見捨てる神が嫌いです。祈れ祈れと人間に指図しているのに、必要なときには何もしない唯一神など糞でも喰えとさえ思います」

強い衝撃を受けて息を詰めた瞬間には、あまりに簡単に床に投げ飛ばされていた。

にこにこ微笑をたたえた彼は、こちらをじつと見下ろしていた。

「神と仏の違いが、あなたにはわかりますか？」

その問には、答えなかった。

答えなくとも彼は答えを言うだろう、ということがその瞳を見ていればわかったからだ。

「神は身勝手です。規律だの、祈りだの、そんな不確かなものが本当に届くとてもお思いなのでしょうが」

ふりかざされた黒い槍が突き刺さった。彼は、腐りかけた木の板に深く突き刺さった槍の石突に片手をのせた。

腹の上に革靴がのる。

「けれども仏は違う。人間が愚かなことを最初から知っているから、『何かをしてもらおう』などという愚かな考えを持つ人間に試練を与えることで、生きることの重要さを知らせようとしている。仏を称える言葉は、形式美というものでございますよ」

ぐり、と靴が腹を抉るように動いた。

痛みに小さくうめいた。

「仏は試練をお与えになった。それが輪廻転生・六道輪廻」

六、とき生まれた赤い瞳は妖しく輝いていた。

ただの人間ならばありえないかたちの瞳は絶大な存在感を持って、その白い顔に存在している。

「人間とは弱い存在でございませぬので、前世の記憶がはつきりと残らない。だから、生まれながらの迷いとは何なのかすら迷い、迷いを断ち切るために何をすればよいのか迷う。迷いを抱えたまま死にゆき、輪廻の輪からは永久に抜けられない」

その瞳は今、全てを見透かすように細められている。

「僕の見せる幻覚は、ただのまぼろしではございませぬ」

石突にのせた片手をゆっくりとこめかみにすべらせ、白い指が頭をおさえた。白い貌に再び、慈愛に満ちた笑顔がにっこりとのる。

「記憶なのですよ。誰もが持っている、地獄を視た記憶。もう誰もが忘れてしまった戒めの記憶。それを呼び起こすだけです。だから、彼らが見るまぼろしははつきりと僕に見えない」

彼がすつと片手を広げると目の前に広がったのは、今まで見ていた廃屋の様子ではなかった。

その様子に驚き、それから、納得した。

彼の能力は幻術だ。彼がいうことが正しければ、それは誰もが持っている、地獄を視た記憶。

「僕は普通の人と何ら変わらないと思っております。ただ、前世の記憶がはつきりと残っており、その記憶を僕の意志で呼び覚ますことができるといっただけです」

目の前に広がっているのは目を背けたくなるような光景であった。脳をゆさぶるような絶叫を外れそうなほどに開いた口からほとばしらせているのは、針の上を歩かされる人間の姿。

胃液がたまつて腹部の脹らんだ骨の浮くほど痩せた人間が、ぱつくりと開けた口の中には舌がない。

肉の腐った臭いを放つ、蛆だらけの真つ赤な池の中には、生きた人

間がもがいていた。

それは、地獄で罰を受ける人間の姿であった。そして、ゆったりと嗤う、美しい姿をした鬼。その手には鋭い鉤のついた人間の脂と血に濡れた、棍棒。もう片方の手で奥を指さしていた。

「僕の野望をお話ししましょうか？」

彼はそう言い、嫣然と嗤ってみせた。

その表情に既視感を覚えた。

(後書き)

趣味 この二文字だけで書いたような気がする。マニアックですみません

なんでお相手をひばりにしたのか自分でもわからない。いつごろの話なのか自分でもわからない。

やまなし おちなし いみなし りやくしてやおい ちなみにま流行りのベーこんれたすとは関係ないです

りぼーんにはもつと宗教的要素があってもいいと思うそんな自分。なんとなく口調が違う気がするのは仕様。

ええと、わたくしは勝手に馬鹿丁寧で胡散くさいほうが六道骸っぽいと思っておりますので、だから原作の口調と少し雰囲気が違うかもしれない。ちなみに、わたくしは六道骸の信者です。でも今やっているりぼーんのこととは正直よくわからない。17巻で買うのをやめてしまったわたしは負け組。新しい登場人物がいっぱい増えてますね。

ローマ(イタリア)生まれの信徒ってなんか燃えますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5289o/>

輪廻転生

2010年10月26日21時42分発行